

西洋中世学会第8回大会

自由論題報告・報告要旨

6月11日(土) 14:00~18:00

文科系総合講義棟2階 法学部第2講義室201

第1報告(14:00~14:45)

家族と離れて働く

——中世末期フィレンツェにおける乳母・家内使用人の賃金記録——

濱野 敦史 (独立研究者)

司会: 徳橋 曜 (富山大学)

乳母や家内使用人として主人の家に住み込んで働くことは、中世の都市において女性が現金収入を得るための数少ない手段であった。本報告では、そのように家族のもとを離れて働いていた女性のすがたを再構成する。

下層民をとりまく状況については、これまで十分に考察が進められてきたとは言いがたい。史料上の制約から、下層民の生活を探る試みは法令や規約の分析にもとづく労働環境や賃金額から想定される生活水準の提示にとどまっていることが少なくない。こうした分析は平準化した像を描こうとするあまり、かえって実際のすがたから遠ざかってしまっているおそれがある。こうした問題は、女性労働を扱う研究にもおなじように当てはまる。

そのような研究状況を打開するためには、個別事例の検証によって下層民のすがたを再構成することも有効ではないだろうか。本報告では、15世紀後半にフィレンツェのサッセッティ家に住み込んで働いていたアントーニアという女性を取り上げる。分析にあたっては、帳簿を史料としてもちいながら、ミクロストーリーの手法を取り入れる。

アントーニアは、乳母としてサッセッティ家にやってきて主人の息子と娘に授乳したのちに、家内使用人となってサッセッティ家に仕え続けた。そこで働いた期間は合計して10年ほどにわたっている。そのあいだに支払われた賃金の記録は、サッセッティ家の帳簿に書き込まれている。そこからは、乳母や家内使用人への賃金の支払いにはどのような慣習があったのか、そしてアントーニアの活動が家族にとっていかに重要であったのかがあきらかになる。

アントーニアの家族は、ある程度まで再構成できる。これは、賃金の受け取り手などとして、離れて暮らすアントーニアの家族が登場するためである。アントーニアには夫、そして義理の息子と娘がいた。しかし、アントーニアが主人のもとに住み込んでいるあいだに、夫は死去してしまう。その結果、アントーニアは婚家とのつながりを断ったようだ。当初、賃金を受け取りに来ていたのは夫や息子であったが、血のつながった兄弟やその親族がそれに置き換わる。

賃金は特定の日に支給されていたわけではない。アントーニアが賃金を受け取るためには、なぜ

賃金を受け取る必要があり、その目的のためにいくら必要であるのかを主人に伝えなければならなかった。主人はその内容を帳簿に細かく記入している。賃金は現金で手渡される場合もあるが、現物で支給されたり、アントーニアが購入した品物の代金として主人から販売者に直接支払われたりしているときもある。アントーニアが頻繁に購入したのは、衣類やそれをつくるための生地だった。こうした衣類などの一部は、家族のもとに送られている。家族や親族からすれば、アントーニアの賃金は確実な現金収入として期待できただけでなく、一度に多額の出費が必要な場合にも重要な役割を果たした。それはアントーニアが姪の嫁資の一部を負担していることからもうかがわれる。

第2報告 (14:45~15:30)

Peter Idley の職務経歴—15 世紀イングランドの英語教訓文学を担った社会階層

工藤 義信 (金沢学院大学)

司会：新井 由紀夫 (お茶の水女子大学)

本報告では、15 世紀イングランドの英語教訓文学を担う社会階層を考えるための一例という観点から、Peter Idley の職務経歴を再検討する。

Peter Idley (d. 1473/4) は文学史の領域で、英語の教訓文学 *Instructions to his Son* の著者として知られてきた。*Instructions to his Son* の現存写本は断片を含めて 9 点あり、15 世紀イングランドで比較的良く読まれていた作品であることが伺える。作者の伝記的事実については、著書の中で自らをケント出身の *esquire* であると述べていること、息子 Thomas に向けてこの教訓書を書いていること以外に手掛かりはなかったが、D'Evelyn (1935) によってこの作者が、Oxfordshire と Berkshire をまたがる地域の *bailiff* を務めていた Peter Idley と同一人物であることが発見され、作者の生涯に関するさらなる探究の可能性が広がった。

その後 Sullivan (1994) が新たな史料をもとに Idley の行政職の経歴に関する重要な追加情報を発表しており、これに従えば Idley は、D'Evelyn が説明するよりも当世の王権からより多くの恩恵を受けた人物として浮かび上がってくる。だが、Sullivan の記述はどの史料から Idley に関するどの事実が導き出されるのか明確にされておらず、とくに *Controller of King's Works* への任用回数や時期など、D'Evelyn の説明と矛盾するところをどのように捉えたらよいのか判然としない。

D'Evelyn と Sullivan それぞれの記述が提示する Idley の社会階層は異なるものである。それにもかかわらず、Sullivan が新たに提示した新事実をそのまま正しいものとして認めてよいのかという検証や、そうした新たな事実を踏まえて見えてくる Idley の人物像が、教訓文学の書き手の社会層として、どのような重要性を持つのかということについては、今日まで議論がなされていない。

本報告では、Peter Idley の職務経歴を再検証した上で、文学史的観点からその重要性を考察する。中世後期イングランドにおいて、高度な読み書き能力を必要とする職務がより多様化し拡大していたこと、また、14 世紀後半から 15 世紀にかけて、英語で詩を書く社会層が広がりを見せつつあったという文脈を踏まえつつ、チャーサー以降の役人の詩人の系譜の中に Idley がどのように位

置づけられ、またどのような点で特異であるのかを明らかにする。Idley が書いたテキストの性質を踏まえ、15 世紀の教訓的英語詩を作り、また読み親しんでいた社会階層について、Idley の一例が示唆することを指摘する。

第 3 報告 (15:30~16:15)

問題ある説教者ジョン・ボールの肖像

赤江 雄一 (慶應義塾大学)

司会：城戸 毅 (東京大学名誉教授)

1381 年のイングランド「農民反乱」において、反乱者たちはケントおよびエセックスからロンドンにむかって進み、ロンドン市内にはいってカンタベリー大司教ら王の側近たちを殺害し、彼らと関わりのある宮殿や修道院等を焼き払い、王との面会を果たすほどであったが、その直後の首謀者ワット・タイラーの殺害を機に反乱は鎮圧された。反乱はロンドン以外の各地で起こったが、とくにロンドンでの出来事は当時の支配者層に大きな衝撃を与え、多くの記述が残されることになった。その研究が 19 世紀末以降、さまざまな年代記の古典的な比較分析、いわゆる社会経済史的な背景の探究、裁判記録などの法史料の発掘と検討、さらには言語論的転回を意識した英文学研究者による年代記記述の分析を通じて進められてきた。

本報告の対象であるジョン・ボールの名は、ワット・タイラーと並んで反乱者たちの中心的人物としてよく知られている。反乱者の群衆が王との面会を目指してテムズ川南の高台に位置するブラックヒースに集まっていたときに、ボールが彼らに語ったとされる説教は「アダムが耕しイヴが紡いでいたときいったい誰が領主だったのか」という言葉によって西洋中世でもっとも有名な説教のひとつとなっている。しかし、この説教に関する記述については、その知名度の割に、マーガレット・アストンが 90 年代に論じているものを例外とすれば正面からの検討がなされてきたとは言えないし、アストンの論にも問題が多い。ボールにかんして近年もっぱら注目を集めてきたのは、複数の年代記に引用されている、彼が仲間たちに送ったとされる謎めいた手紙である。

本報告は、説教者としてのボールに改めて焦点を定め、年代記史料—とりわけセント・オールバンズ修道院の修道士トーマス・ウォルシングムの『大年代記』とフロワサールの年代記—におけるボールについての記述を、報告者自身も携わってきた説教研究の知見に照らして再検討する。その際に重要なのは、ウォルシングムをはじめとして多くの年代記作者たちが、ボールをオックスフォード大学の神学者ジョン・ウィクリフから強く影響を受けた人物として描いていることである。ウィクリフは、ロンドンでの説教等を通じて異端的教説を広めていると農民反乱以前から徐々に問題視されつつあった。諸年代記の記述は、問題ある教説をまきちらす説教者という点で、ウィクリフとボールとを重ね合わせているのである。しかし、当の説教という観点から検討しなすならば、年代記史料の記述はこれまでとは異なった光を投げかける可能性がある。本報告では、言語論的転回以降の年代記史料の読み方を踏まえて、年代記の相互比較、同時代の説教規範の検討、ウィクリフやウィクリフの追随者によって行われた説教との比較等の作業を通じて、印象論で語られがちだったボールの肖像にこ

れまでよりもはっきりとした輪郭を与えることを目指す。

第4報告 (16:30~17:15)

ルーカス・クラナハ (父) 作《カリタス》をめぐる一考察—後期様式の寓意画にみられる多義性—

伊藤 麻衣 (東北大学)

司会：今井 澄子 (大阪大谷大学)

1522年の聖像破壊運動を機に、ルーカス・クラナハ (父) はルター教義の視覚化によって新たな宗教表現を生み出し、同時に神話画や教訓画のテーマも広げていった。その中に、森の中に佇む裸体の母子像を描いた《カリタス (Caritas)》も挙げられる。この作品は、クラナハが手がけた数少ない擬人像をテーマとしており、1530年以降に定着した新たな主題のひとつとして繰り返し制作されてゆくことになる。

この「カリタス (慈愛)」の図像表現として、具体的な慈善行為を描いたもの、またはキリスト教的七つの美德を擬人化したものが中世より踏襲されてきた。前者は、施しによる他者救済を「七つの慈悲の行い」として具体的に表したものである。一方後者は、幼子を慈しむ女性の姿をとり、聖堂の扉を飾るモチーフなど他の6つの擬人像と共に美德の寓意のひとつとして表されるようになった。この七つの美德は七つの悪徳と対置されており、美德と悪徳の戦いと美德の勝利というテーマは、プルテンティウスの『プシコマキア (靈魂をめぐる戦い)』などで見られる。このような寓意文学に影響を受け、エアハルト・シェーンによる七つの美德を主題とする木版画などが生み出され、カリタスを含む美德の寓意表現は発展してゆくことになる。

しかし、クラナハは他の美德の擬人像と共に描くことはなく、《カリタス》を単体作品として集中的に取り組んだ。この制作の背景には、クラナハと親交のあったマルティン・ルターの神への愛、自己愛、隣人愛に対する思想が大きく関わってくる。また、クラナハの前後の時代の作品と比較すると、擬人像が裸体であることが大きな特徴として挙げられるだろう。自然と裸体の人物という組み合わせは、15世紀に普及したモチーフ「森の中の野生の夫婦/家族」を思わせるものがある。未開の親子像は、素朴にして純粹という美德を備え、家族愛の象徴として肯定的に解釈されていた。同時にそこには、プロテスタンティズムの影響により制作が減少しつつあった《聖母子》のモチーフも重ね合わせられている。

このように1520年代後半より、クラナハは転用したイメージをもとに新たな図像伝統を確立していった。これらを踏まえ本報告では、ルター教義におけるカリタスの重要性を踏まえつつ、1520年代後半以降の作品や従来の視覚伝統と比較し、クラナハの《カリタス》の独自性や多義性について考察してゆくことが目的である。

第5報告 (17:15~18:00)

Oriental Fantasy in Lambert le Tort's *Roman d'Alexandre*

David Rollo (University of Southern California)

司会：辻部 亮子 (九州大学非常勤)

Late in his *Roman d'Alexandre*, Lambert pauses in his description of Indian conquests to remark: “I wish that my song be heard by such people who will well know how to understand what it signifies: if anyone sings to a bull’s arse, his point is lost.”

Shortly before he makes this comment, Lambert tells a tale of seductively deceptive representation. To paraphrase: having heard rumors of the irresistibly handsome Alexander, the Indian Queen Candace sends her court painter to the Greek camp secretly to make a full-length portrait of the king. It is done, and the painting is duly smuggled back to the Queen’s person chambers, where it can be adored in lieu of the man it represents. The verb Lambert uses for “to paint” is not “peindre,” but “escrire, (literally, “to write”). From then on, in the words of Queen Candace, Alexander becomes not the greatest king to have ever lived, but the greatest king to have ever been painted/written.

I interpret this emphasis upon representation over reality to bespeak a wider acknowledgment on Lambert’s part of the fictive underpinnings of the romance itself and conclude that the “true knights” of Lambert’s audience were indeed being guided to interpret the fabulous orient as a vehicle for fantasy (in Lambert’s words, “merveille”), and not, in this case, a site for historical narrative.